

国史跡 三ツ塚廃寺跡



三ツ塚廃寺跡復元想定図(宮上茂隆 画)

丹波市教育委員会

みつづかはいじ てんじんかまあと 三ツ塚廃寺と天神窯跡

三ツ塚廃寺は、白鳳時代の終り頃(約1300年前)に建てられた寺院跡です。当時は、仏教が伝来して間もない頃で、各地の豪族は自らの権力を誇示するために古墳に替わって寺を建てていました。

全国各地で白鳳時代から奈良時代(1300~1200年前)にこのような寺が600以上建てられましたが、丹波市内で現在見つかっている白鳳時代の寺跡は、三ツ塚廃寺跡だけです。

●寺の様子

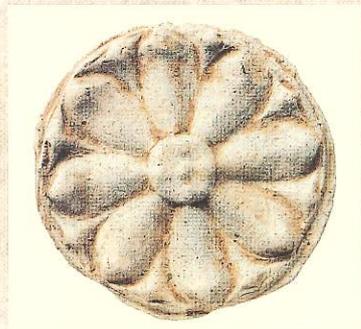
主要伽藍の規模は、およそ1町四方(約110m)で東西約116m、南北106mでした。東辺と南辺の各中央には門跡が見つかったことから、周囲には築地がめぐり、東西南北辺の中央にそれぞれ門があったと推測されます。さらにその内側には、中門跡が見つかり回廊がめぐっていた可能性があります。

中央には基壇が3つ並び、瓦積で化粧された東西両端の二つの基壇には塔が、真ん中の基壇に金堂が建てられていました。この伽藍配置は、新治廃寺式^{にいじはいはいし}とって全国では茨城県の新治廃寺と兵庫県龍野市の奥村廃寺、そして三ツ塚廃寺の3例しかない珍しいもので、薬師寺式の一変形とも考えられています。

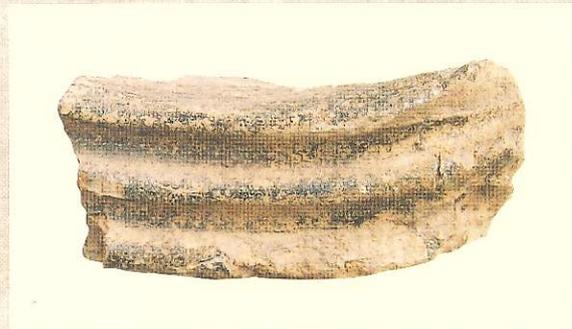
また、寺の周囲には、多くの掘立柱建物が見つかり、住居や倉庫として使われていました。



東塔基壇の発掘調査状況



素縁八葉蓮華文(軒丸瓦)



三重弧文(軒平瓦)

三ツ塚廃寺で使用された瓦は、軒丸瓦は素縁八葉蓮華文で、大きさなどから3種類に分けられます。その中には、裏面に瓦の製作時にできた布紋り痕が残っているものもあります。

一方の軒平瓦は、三重弧文で段顎をもつものと文様のない素文のものがみつかっています。

●寺の終焉

寺は、奈良時代の終り頃にはさびれ、平安時代には建物も火災によって焼失してしまいました。焼け跡には3つの基壇だけが残り、寺は人々の記憶から消え去りました。この基壇の跡が塚(古墳)のように見えたことから、後世「三ツ塚」と呼ばれるようになりました。

●史跡公園として

戦前から遺跡の存在は知られていましたが、昭和40年代の農地整備に伴い、遺跡の調査や保存整備に対する気運が高まりました。そして、昭和47年以降5次にわたって行われた発掘調査によって、廃寺の構造や規模が明らかになり、昭和51年12月25日国の史跡に指定されました。この発掘調査の成果に基づき古代寺院跡として兵庫県内でもいち早く復元整備が行われ、現在は史跡公園となっています。



三ツ塚史跡公園全景

●天神窯跡

天神窯跡は、三ツ塚廃寺跡東側の山麓にある窯跡です。

平成9年に行われた発掘調査で、斜面を利用して造られた4基の窖窯とそれに伴う排水溝が見つかりました。

1・2・3号窯は、床面が階段状になっていて瓦を焼くことを目的とした窯と考えられます。4号窯は、床面に段のない須恵器窯の形態をしています。3号窯と4号窯からは鴟尾と呼ばれる飾り瓦が出土しました。



4号窯跡(鴟尾出土状況)

●^し鴟^び尾

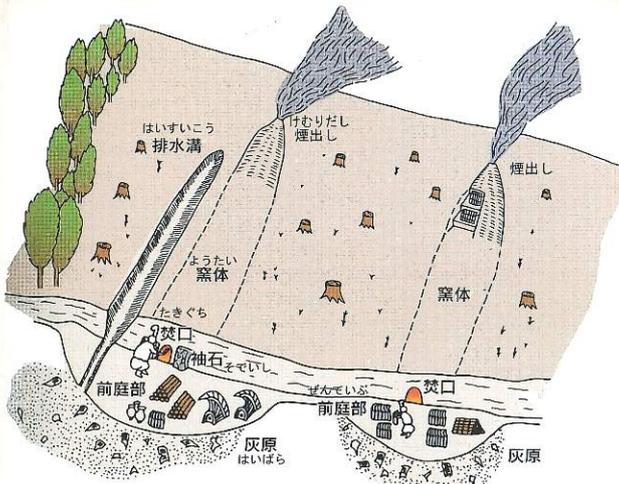
鴟尾は、屋根の大棟の両端に置かれた棟飾りです。

4号窯から出土した2点の鴟尾は、段と縦帯以外に装飾のない、百濟様式と呼ばれる7世紀主流の形です。

窯跡から見つかったのは、失敗作で窯の中にそのまま放置されたためと考えられます。このように、鴟尾が窯跡からほかの瓦や土器とともに出土し、ほぼ完全に復元できたことは大変貴重です。



整備後の天神窯跡



窯操業の想定図(天神窯跡発掘調査現地説明会資料より)



鴟尾

三ツ塚廃寺と周辺の遺跡

かものしょう

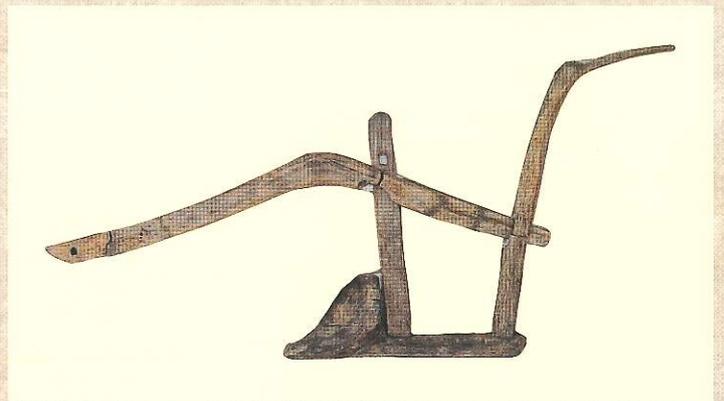
鴨庄古窯跡群

三ツ塚廃寺の東方・鴨庄地区にある7世紀前半に始まる須恵器窯跡群です。現在33基が確認されており、三ツ塚廃寺と同時期に操業されていた窯として、密接な関係があったと推測されます。

かじわら

梶原遺跡

旧石器～奈良時代の遺物や遺構が見つかり、飛鳥時代(7世紀中葉)の犁2点が見つかりました。この犁は、長床犁と呼ばれるもので、全国でも最古級のものです。



梶原遺跡出土犁

